

為替週間展望 = ドル円は高値圏でのみみ合いか

[6月6日からの1週間の展望]

週間高低 (カッコ内は日)		5月30日～6月3日			
	始値	高値	安値	終値	前週比
ドル・円	127.17	130.24(2)	126.86(30)	129.89	+2.78
ユーロ・ドル	1.0730	1.0787(30)	1.0627(1)	1.0756	+0.0021

=====

国内株・金利 / 米国株・金利		終値 前週末比		終値 前週末比	
日経平均株価	27,761.57	+979.89	日本10年債利回り	0.234	+0.001
ダウ平均株価	33,248.28	+35.32	米10年債利回り	2.908	+0.170

=====

<来週の主要経済統計等>

- 6日 中国5月財新サービス業PMI
黒田日銀総裁講演
- 7日 日本4月勤労者世帯家計調査
豪中銀(RBA)政策金利
日本4月景気動向指数速報値
独4月製造業受注指数
英5月非製造業PMI確報値
米4月貿易収支
カナダ4月貿易収支、カナダ5月Ivey購買部協会指数
- 8日 日本第1四半期国内総生産(GDP)2次速報、日本4月経常収支・貿易収支
スイス5月雇用統計
独4月鉱工業生産指数
ユーロ圏第1四半期域内総生産(GDP)確報値
経済協力開発機構(OECD)経済見通し
- 9日 中国5月貿易収支
欧州中央銀行(ECB)政策金利
ラガルドECB総裁記者会見
米新規失業保険申請件数
- 10日 中国5月消費者物価指数、中国5月生産者物価指数
米5月消費者物価指数
カナダ5月雇用統計
米6月ミシガン大学消費者信頼感指数
米5月財政収支

【前回のレビュー】FRBによる金融引き締め加速による景気減速懸念が、米国株の一段の下落、米長期金利の低下、ドル売り円買いにつながりやすい流れが続くとみられる。こうした中、ドル円は上下に振幅しながら軟調な推移が継続するとした。

【要人発言で金融引き締め警戒感が再燃】

米連邦準備制度理事会(FRB)のウォラー理事が5月30日の講演で、インフレ率がインフレ目標の2%に接近するまで0.50%の利上げを行うことに前向きな見解を示した。この発言を受けて、米国でのインフレ率の高止まりが長期化すると懸念やFRBによる積極的な引き締めへの警戒感が再燃している。

1日に発表された5月の米ISM製造業景況指数は56.1となり、事前予想の54.6だけでなく、前回の55.4も上回った。事前予想に反して上昇したことで、米

国経済の強さが再認識されて、積極的な金融引き締めが意識されて、米長期金利が上昇した。

ドル円は5月24日に126.36まで下落した後は126～127円台でのみ合いが続いた。その後はウォー理事の発言などもあり、5月31日に128円台まで上昇、6月1日には129円台まで上値を伸ばして、米ISM製造業景況指数の発表を迎えた。同指標が予想に反して上昇したことでドル買いの動きに傾き、ドル円は130.10台まで上値を伸ばした。2日は130.24近辺まで上昇したものの、その後は伸び悩みを見せている。

ドル円は対ユーロでのドル安などを受けて、一時軟調な推移を見せていたものの、FRBによる積極的な金融引き締め観測が再燃したことで、ドル売りの動きが一服している。ドルインデックスは5月13日の105台から5月30日には101.20台まで下落した。その後は上昇に転じており、102.70台まで戻りを見せた。

6月6日の週で最も注目されるのは10日発表の5月の米消費者物価指数となる。大方の事前予想では前年比+8.2%、コア指数は前年比+5.9%となっている。前回(4月)は前年比+8.3%、コア前年比は+6.2%となり、3月と比べて伸び率が低下した。今回も伸び率は低下が見込まれているものの、引き続き高水準を維持している。

インフレ率がピークアウトした、あるいは近いうちにピークアウトするとの見方も一部にはあるものの、水準そのものは極めて高水準を維持している。実際に顕著な低下傾向を示すまではかなり時間がかかりそうだ。今回、米消費者物価指数が市場の想定通りの内容となれば、金融引き締めへの警戒感は依然として続きそうだ。

タカ派として知られるウォー理事の発言以降は、FRBによる積極的な金融引き締めへの警戒感が再び広がっている。金融引き締めを警戒した米国株の下落でリスク回避の円買いの可能性も高まりそうだ。ただ、米長期金利は高止まりして、ドル円も大きな崩れは想定しにくく、高値圏でのみ合いが続くとみられる。ドル円の目先の予想レンジは、127.50～132.00円。

今後の日米の経済指標やイベントとしては、7日に日本4月勤労者世帯家計調査、日本4月景気動向指数速報値、米4月貿易収支、8日に日本第1四半期国内総生産(GDP)2次速報、日本4月経常収支・貿易収支、9日に米新規失業保険申請件数、10日に米5月消費者物価指数、米6月ミシガン大学消費者信頼感指数、米5月財政収支などがある。

【ユーロドルは再び上値を追う展開か】

欧州中央銀行(ECB)のラガルド総裁など当局者による金融正常化への前向きなコメントを背景にユーロドルは5月13日の1.03台半ばから5月30日には1.07台後半まで上昇を見せた。ただ、その後はFRBによる積極的な金融引き締め観測が再燃してドル買いの動きに傾いたことで、ユーロドルは一時伸び悩みを見せた。ただ、調整の動きは一時的なものにとどまった。

ECBによる利上げについては、当局者の間でも見解が分かれている。5月31日発表の5月のユーロ圏消費者物価指数速報値は前年比+8.1%となり、事前予想の7.8%や前回の7.4%(確報値)を上回った。インフレ率の高進を受けて、利上げに関しては7月に0.25%の利上げは確実とみられるが、0.50%の利上げが必要と指摘する向きもある。当局者による7月や9月のECB理事会での利上げに関する前向きな見解が増えるようだと、ユーロ高につながりやすくなる。

ECBによる金融正常化の流れはユーロドルの支援材料となろう。FRBによる金融引き締め加速の流れは続きそうだが、市場への織り込みはかなり進んでいるとみられる。その分、ECBによる利上げの織り込みが進むと、ユーロドルは一段と上値を追う展開が見込まれる。ユーロドルの目先の予想レンジは、1.0600～1.0900ドル。

日米以外の今後の経済指標やイベントは、6日に中国5月財新サービス業PMI、7日に豪中銀（RBA）政策金利、独4月製造業受注指数、英5月非製造業PMI確報値、カナダ4月貿易収支、カナダ5月IVEY購買部協会指数、8日にスイス5月雇用統計、独4月鉱工業生産指数、ユーロ圏第1四半期域内総生産（GDP）確報値、9日に中国5月貿易収支、欧州中央銀行（ECB）政策金利、ラガルドECB総裁記者会見、10日に中国5月消費者物価指数、中国5月生産者物価指数、カナダ5月雇用統計などがある。

MINKABU PRESS 佐藤昌彦

※投資や売買についての判断は自己責任でお願いします。

<免責事項>

本レポートは情報の提供のみを目的としています。投資に関する最終判断はご自身の責任においておこなわれるようお願いいたします。また本レポートに掲載している情報の正確性については万全を期しておりますが、人為的、機械的その他何らかの理由により誤りがある可能性があり、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドは、利用者がこれらの情報を用いて行う判断の一切について責任を負うものではありません。また、株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイドが提供するすべての情報について、許可なく転用・転載等することを固く禁じます。

<著作権について>

本レポートの著作権は、原則として当社(株式会社ミンカブ・ジ・インフォノイド)が保有しており、著作権法、その他の法律および条約により保護されています。本レポートご利用のお客様は、私的使用目的の複製、引用等著作権法上認められている範囲を除き、当社およびその他著作権者の許諾なく、これらの著作物を翻案、公衆送信、営利を目的とする使用等いかなる目的、態様においても利用することはできません。